

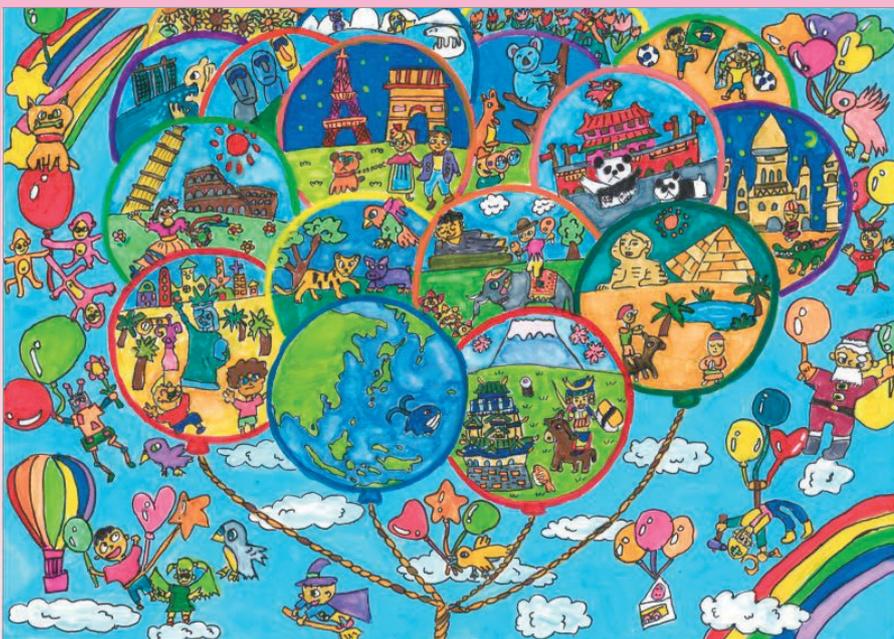
# 平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター  
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實  
広島平和文化センター会長

## こどもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト2025 受賞作品



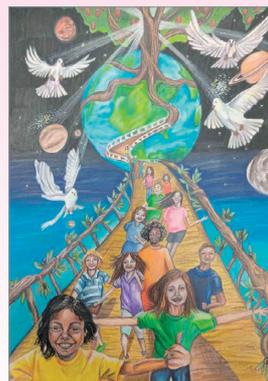
6歳～10歳の部  
平和首長会議会長賞／最優秀賞  
岐阜県川辺町 細江 航平さん(10歳)



6歳～10歳の部 優秀賞  
広島県広島市 三島 遼さん(8歳)



6歳～10歳の部 優秀賞  
イラン シーラズ  
アナヒタ・ポロマンド・プールさん  
(10歳)



11歳～15歳の部 優秀賞  
ヨルダン ザルカ  
ラヤン・ジャラダットさん  
(14歳)



11歳～15歳の部 最優秀賞  
イラン アフヴァース  
ヒラド・サヘビさん(15歳)



11歳～15歳の部 優秀賞  
東京都八王子市  
旗野 寧音さん(15歳)

### 目次

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 写真:こどもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト2025受賞作品……………  | ① | 被爆者の皆様との対話 被爆体験証言者感謝状贈呈式を開催……………              | ⑦ |
| 「核兵器が子どもたちに与える影響」(タイム・ライト)……………         | ② | 祈念館企画展「受け継ぎ、語り継ぐー原爆と第一県女ー」／                   |   |
| 被爆体験記「茸雲の下の悲惨な状況を見ながら走って逃げた記憶」(天野幸吉) …… | ③ | 資料館企画展「被爆した東南アジアの留学生ー国を越えた友情ー」／               |   |
| 若い世代への平和学習に焦点を当てた「平和首長会議インターンシップ」 ……    | ④ | 「We're Peace-Loving Citizens!」缶バッジ(令和8年版)を販売／ |   |
| 多摩平和サミットでの市長と若い世代との対話……………              | ⑤ | 令和8年ヒロシマ・メッセンジャー決定……………                       | ⑧ |
| 国連本部に広がった、こどもたちの“平和なまち”……………            | ⑥ |   |   |





## 核兵器が子どもたちに与える影響

ティム・ライト  
核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN)  
条約コーディネーター

〔ティム・ライト〕

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)の条約  
コーディネーターで、「子ども平和メモリアル」  
の発案者です。



2025年3月に採択された核兵器禁止条約 (TPNW) 第3回締約国会議の宣言において、子どもたちが「特有の脆弱性」を有するがゆえに、核兵器が「特別に深刻な影響」を与えることを示す研究成果が着実に積み重なってきていると指摘されています。

今日、都市に対する核攻撃が行われた場合、最も深刻な被害を受けるのは子どもたちであるという事実は、核兵器がもたらす世界的な脅威の高まりを論じるうえで中心に据えられるべきであり、核兵器廃絶に向けて力を合わせて行動するための原動力とならなければなりません。

80年前に行われた米国による広島・長崎への原子爆弾投下では、公的な推計によれば、3万8,000人を超える子どもが命を奪われ、さらに数え切れないほど多くの子どもたちが、深刻な身体的傷跡や心理的トラウマを負いました。

広島平和記念資料館に常設展示されている、<sup>つたに</sup>鍍谷伸一さん(当時3歳)の焼けた三輪車は、子どもたちに加えられた被害を象徴する存在として、広く知られています。被爆当時、伸一さんは三輪車に乗っていて重傷を負い、数時間後に亡くなりました。姉の<sup>みちこ</sup>路子さんと洋子さんも、同じく命を落としています。

「子どもたちが二度とこんな目に遭うことがあってはいけません。」

伸一さんの父、<sup>のぶお</sup>信男さんは、後年、そう振り返っています。

「どうか、子どもたちが心ゆくまで遊ぶことのできる、平和な世界をつくるために力を尽くしてください。」

科学的な研究により、核攻撃が行われた場合、子どもたちは大人に比べて死亡する可能性が高いことが明らかになっています。子どもは皮膚が薄く繊細であるため熱傷によって死亡しやすく、また身体が相対的に脆弱であることから、爆風による負傷によって命を落とす危険も大きくなります。さらに、細胞の成長や分裂が活発であるため、急性放射線症によって死亡する可能性も高まります。

また、倒壊して炎上する建物から自力で逃げ出したり、攻撃を受けた後に生存の可能性を高めるための行動を取ったりする能力も、子どもは大人に比べて低いとされています。

長期的には、放射線による細胞損傷の遅発的な影響により、子どもたちはがんなどの疾病を発症しやすくなります。また、困窮や精神的障害に苦しむ可能性も

高く、その結果として、自殺に至るリスクも高まります。

さらに、被爆時に母親の胎内にいた子どもたちは、出生直後や幼少期に死亡するリスクが高まるほか、発達段階にある脳が放射線に対して脆弱であることから知的障害を負う可能性、甲状腺機能の低下による成長障害、そして小児期や成人後のがんやその他の疾病を発症するリスクも高くなります。

こうした恐るべき現実、核兵器を保有している国々、そして軍事同盟のもとで核兵器の保有や使用の可能性を支持している国々——日本を含めて——の政策決定に、深い示唆を与えるものでなければなりません。

この2年間、核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN) は、広島・長崎で被爆した子どもたち、また世界各地に存在する核実験場の風下や川の下流域に暮らす子どもたちが被ってきた特有かつ特別な被害に光を当てるため、粘り強い取組を続けてきました。

2024年には、この問題に関する詳細な報告書を公表し、2025年には、子ども平和メモリアル (Children's Peace Memorial) を立ち上げました。これは、広島と長崎で命を奪われた400人を超える子どもたちを紹介するウェブサイトで、彼らの短い生涯や苦痛に満ちた最期、そして遺された家族の深い悲しみが、胸を打つ形で紹介されています。

このメモリアルの制作は、13歳で広島で被爆し生き延びた、サーロー節子さんの生涯にわたる活動に着想を得たものです。彼女は、多くの講演の中で、自身が通っていた学校で命を落とした生徒や教師の名前が記された大きな黄色い横断幕を掲げます。そうすることで、死と破壊がもたらした被害の規模を聴衆が実感することができる、彼女は語っています。

「これをご覧ください。ここに記された一つひとつの名前は、誰かに愛され、あの日の朝8時15分まで、それぞれの人生を生きていた、実在した人間のものであることを感じ、想像してほしいのです。」と、彼女は訴えます。

広島で命を奪われた子どもたちの物語を伝える初期の取り組みの一つが、1954年に刊行された『追憶』です。この書籍には、犠牲となった広島第一中学校(現広島国泰寺高校)の男子生徒たちを追悼する86編が集められており、その多くの文章は、子どもを失った親たちによって書かれました。

この追悼文集の序文で、広島一中遺族会長の秋田正之さんは次のように記しています。

「この素朴で拙ない父兄、母姉たちの文章が、一人でも多くの人目に触れ、人類の惨劇の再現を防ぐ上で、たとえわずかなりとも役立つならば、遺族の一人としてこれにまさる喜びはない。」

私たちが、オンライン上のメモリアルを通じて、子どもたちの物語を改めて伝えることを選んだのも、まさにこの思いに基づくものです。私たちは、このメモリアルが、核兵器がもたらす深刻で増大する脅威に世界の人々が目を向け、年齢を問わず、誰一人として同じ運命をたどることがないようにする一助となることを願っています。

言うまでもなく、それを保証できるのは、核兵器の全面的な廃絶のみです。私たちは、核兵器禁止条約(TPNW)こそが、その目標に至る最も有望な道筋を示していると信じています。この条約は、核兵器を包

括的に禁止するだけでなく、検証可能かつ不可逆的な廃絶の枠組みと、核兵器の使用や実験による被害者を支援するための枠組みをも定めています。

すでに世界の過半数の国々が、この条約に締約国または署名国として参加しており、さらに多くの国々が参加を検討しています。こうした一つ一つの署名や批准が、最悪の大量破壊兵器に対する国際的規範を強化し、核兵器廃絶に向けた圧力と勢いを生み出しています。

国連事務総長のアントニオ・グテーレスは、次のように述べています。

「核兵器は、人類がつくり出したものの中で最も破壊的な力です。核兵器は安全を保障するものではなく、もたらすのは殺戮と混乱だけです。核兵器を廃絶することは、私たちが将来世代に残すことのできる、最大の贈り物なのです。」

(2026年1月)



### 被爆体験記

きのこくも

## 茸雲の下の悲惨な状況を見ながら 走って逃げた記憶

天野 幸吉

本財団被爆体験証言者

〔あまの こうきち〕

1939年生まれ。6歳の時、爆心地から1.6 km離れた自宅で、家族と朝食を食べている時に被爆。

原爆が投下された1945年当時は、爆心地から1.6キロメートルの横川町二丁目（駅前あたり）に住んでいて、父母、16才の長姉、9才の次姉、満6才の私と満3才の弟の6人家族で暮らしていました。

1945年4月、私は三篠小学校に入学しました。空襲から頭を守るため防空頭巾を被り、下駄を履いて次姉と一緒に通っていました。

8月6日の朝は穏やかな青空でした。学校は夏休みで空襲警報もなく、いつもの日常の風景でした。朝食のテーブルについたのは8時5分頃で、当時16歳の長姉は学徒動員で観音にある三菱重工業の工機部で兵器を作る工場に勤めていたのですが、6日の朝は会社を休んで家にいました。

その時、母が「今日は久しぶりに映画か芝居を見に行かんか？」と言い、そんな会話をしていると、食事中に「ピカピカ」と眩しい光が窓から射し込みました。

その2、3秒後くらいに、「ゴロゴロドーン」という大地を揺るがすような轟音が鳴り響きました。一瞬の爆風で、二階建ての家が崩れ落ちました。

父が咄嗟に「伏せー！」と叫び、たちまち湿気を帯びた生暖かいタールのようなにおいの粉塵に包まれて真っ暗になり、朝が夜になって何も見えなくなりました。

誰も声を発しません。息をしなければなりませんから、その真っ黒い空気をもろに吸っていたわけです。どのくらいの時間が過ぎたか分かりませんが、5分か

10分くらいでしょうか。真っ黒がうすくなり、あたりがぼんやり見えるようになり、父の「もう駄目かの一。」という声に長姉が「死にたくない。」と泣き出したのです。

その声に家族は生きる希望を見出し、崩れ落ちた家屋から何とか這い出すことができました。

外に出ると大粒の黒い雨がぱらぱらと降ってきました。その時はもう火の手は上がっていて、あと3分遅かったら焼け死んでいたかもしれません。父は崩れ落ちた家屋の中の人を助け出そうとしましたが、すでに火の手はその人の足元まで迫っており、助けることはできませんでした。

すでに道路を挟んだ両側の家は激しく燃えていて、逃げるのに熱いので毛布や布団を被って逃げました。父が「早く逃げろ！」と叫びました。

裸同然の全身火傷の女の人がゆっくりした足取りで、時によろよろしながら母に近づき、「お水を下さい。お水を下さい。」と水を求めていました。母はこのまま死んでいくのなら、せめて望みを叶えてあげたいと水を与えていました。

川には多くの死体が浮かび、憲兵が山のように積み上げ燃やしていました。

その後、安小学校に避難しました。

長姉は左腕の肩の付け根の肉がガラスの破片で挟り取られ骨が見えていました。弟はガラスの破片が顔に

飛び散り、顔は真っ赤な血で染まっていました。私は腰にガラスの破片が入り込んでいました。

そこで簡単な赤ちんを塗り、包帯を巻いてもらい、母の里である中野村へ避難することにしました。歩くとちくちく痛むのですが我慢して歩きました。

叔母宅に着くと少し眠りました。

夜中に目を覚ますと、母が「いいか、我慢しとけ。」と言って傷の蛆虫を取り去り、私の腰を両親指で思い切り押ししました。2センチメートルくらいのガラスの破片と膿の芯が出てきました。

その後、1年遅れて中野小学校に入学した頃、私は人との違いを知ることになりました。それは突然気分が悪くなったり、めまいが起きたりするからです。

ですから階段を上がったり下りたりする時は必ず右端を歩いていました。そうすれば、めまいが起きてもすぐ手摺りを掴むことができるからです。

そんなことがあって運動会は参加していなかったと思います。よく保健室で横になっていました。

原爆で全財産を失い、高等学校へは行けませんでした。が後悔はしていません。原爆を落としたアメリカも憎んではいません。過ぎ去ったことですから。

でも原爆の恐ろしさは、途切れることなく伝えていかなければなりません。この証言を書いていると、点在した死体や次々倒れていく人の光景が目に見え、悲しい気持ちになりました。

70歳の頃、胃癌の手術で胃の4分の3を切除しました。以上で私の体験談は終わらせていただきます。

## 若い世代への平和学習に焦点を当てた「平和首長会議インターンシップ」

平和首長会議では、2月4日から6日までの3日間、全国15自治体の職員の皆さんの参加を得て、自治体での平和学習に焦点を当てた「平和首長会議インターンシップ」を実施しました。

### 【参加自治体】

北海道北広島市、北海道函館市、山形県山形市、千葉県流山市、千葉県我孫子市、東京都文京区、東京都世田谷区、東京都日野市、東京都福生市、新潟県長岡市、新潟県上越市、愛知県名古屋市、愛知県大府市、長崎県長崎市、鹿児島県鹿児島市

### ■ 1日目－平和行政の現場を知る

谷史郎<sup>たにしろう</sup>平和首長会議副事務総長より、平和学習の内容やその効果、国内における平和学習の実施状況等が紹介されました。

続くアイスブレイクやグループワークでは、日浦<sup>ひうら</sup>聡一<sup>そういち</sup>平和学習課課長補佐によるファシリテーションの

下、各自治体の取組や課題について活発な意見交換が行われました。



グループワークの様子

### ■ 2日目－被爆の実相を学ぶ

平和記念資料館を視察した後、内藤<sup>ないとうしんご</sup>愼吾<sup>ごんご</sup>証言者による被爆体験講話を聴講しました。多くの参加者にとって被爆者の証言を聞くのは初めての経験であり、「被爆の惨状がより具体的に心に迫ってきた。」「被爆者の高齢化が進む中で、直接話を聞いたことは大変貴重だった。」といった声が寄せられました。

午後は、ピースボランティアの案内による平和記念公園の碑巡りや、AIを活用した被爆証言応答装置（試行段階）の体験をしました。実際に現地を歩き、歴史の背景を知ること、被爆経験を肌で感じ、平和への思いを新たにするとともに、伝承の在り方についても深く理解しました。

### ■ 3日目－若い世代に対する平和学習に関する政策案の作成と発表

これまでの学びを踏まえ、参加者が4グループに分かれて、若い世代に対する平和学習に関する政策案を作成し、ワールド・カフェ方式で互いの政策案の共有と対話を行ったのち、松井一實<sup>まつい かずみ</sup>広島市長、香川剛廣<sup>かがわたけひろ</sup>平和首長会議事務総長に発表しました。

Aグループ（函館市、文京区、流山市、長崎市）：  
「持続可能な平和学習」

「現在の平和学習は単発かつ限定的になりがち」との問題認識から出発し、小学生から大人までの連続的な時間軸の中で、世代ごとに役割も持ってもらうながら、学びをつないでいく「学びの循環」を提案しました。小学生は、自治体による広島・長崎への派遣事業を行い、「派遣体験を映像化し、派遣されなかった子どもにも共有すること」をポイントとして示しました。また、中学生は、広島などを修学旅行先とし、「学んだことを小学生に伝えるアウトプットの場を作ること」を提案しました。さらに、高校生以上については、派遣された「被爆体験伝承者」からの学び等を通じて、平和学習の講師として育成するなど、学びを絶やさない取組を示しました。

Bグループ（北広島市、山形市、福生市、大府市）：  
「無関心層を関心層に」

「良い取組をしても、参加者は平和に関心を持っている人ばかり。」という課題を受けて、関心の薄い層

への取組を提案しました。

具体的には、若者が集まる場所でスタンプラリーを行い、「平和を前面に出しすぎず、結果として平和を考えるきっかけ」づくりや、例えば、「AとB、どちらが平和？」と問いかけるポスターの作成・貼出により、見た人が立ち止まって考える機会をつくる取組が紹介されました。

**Cグループ**（上越市、日野市、我孫子市、広島市）：  
「自分ごと化としての平和」

若者の関心が薄い理由について、「共感ができていないこと」を課題として挙げ、世代や地域の距離の遠さ、対話の不足が背景にあると指摘しました。そこで、異なる世代や価値観を持つ人と関わる機会を設け、「自分ごととして捉える」平和学習の在り方を提案しました。

具体的には、多感な時期に五感で感じる体験を重視し、小学生は地域で起きた戦争の話を学び、また、中学生は広島・長崎などを訪れて、同世代との交流も行い、その学びを小学生へ伝えることを示しました。また、高校生は議論を支える役割を担い、大人は伝承者として学校教育に関わるなど、世代をつなぐ役割を持つことが提案されました。

**Dグループ**（長岡市、世田谷区、名古屋市、鹿児島市）：  
「戦後100年・200年を見据えた歴史の継承」

「戦後100年の子供たちは語り部に直接会えない。」という課題を示したうえで、20年後を見据えた目標として、「子供たちの言葉で表現した戦争の実態を表す本」を作る構想が示されました。

具体的には、各自治体で地域の戦争体験を再調査し、平和部局と教育委員会の連携の下、自治体主催のワークショップなどを通じて平和学習を進め、将来的には都道府県単位、さらに国全体へと取組を広げていくロードマップが示されました。そして、最終的には、全国の子供たちが集まり、自分の言葉で戦争の実態を伝え合い、一冊の本としてまとめる目標が示されました。

## ■参加者の声

参加者からは、充実した学びを振り返る声が寄せられています。また、行政の平和啓発事業は単発的になりがちであることを踏まえ、「平和学習を継続して進める視点から事業を検討していきたい。」と、今後の決意を語る参加者もいました。

さらに、広島で被爆の実相を学ぶ経験をしたことで、被爆地や戦争の跡を訪れ、また、体験者の話を直接聞くことが、五感を通じた深い学びにつながると感じたといいます。

今回の学びと築かれたネットワークにより、各加盟

都市における平和推進事業が充実するとともに、さらには全国の平和行政の発展にもつながっていくことを期待したいと思います。

（平和文化企画課）

## 多摩平和サミットでの市長と若い世代との対話

2月15日、パルテノン多摩大ホール（東京都多摩市）において、平和首長会議東京都多摩地域平和ネットワークにより、「戦後80年平和サミット」が開催されました。松井一實<sup>まついかずみ</sup>広島市長も来賓として参加しました。サミットでは、ネットワークに加盟する26市に在住する高校生・大学生26人で構成される「平和ユース」が、昨年8月の広島研修を踏まえ、各市長に平和のメッセージを伝えました。その後の平和ユースと26市長のトークセッションでは、次のような、充実したやりとりがありました。

<sup>かわむらたかし</sup>  
（河村 孝三 鷹市長）

「戦後80年一度も戦争をしなかった日本は平和だったと言ってよいか。」

<sup>やまなかあすか</sup>  
（山中明日奏三鷹市ユース）

「平和は一つではない。核兵器を無くすということもあるが、小さなものだと、家に住めるとか、毎日ご飯が食べられるとか、明日爆弾が落ちないと思える安心といった平和もあると思う。そういう意味で、日本のこの80年は平和だったと思うが、世界には核兵器はあるし、毎日ご飯を食べられない人もいるので、全ての人の平和が実現しているとは言えないと思う。」

<sup>たかのりのお</sup>  
（高野律雄府中市市長）

「平和と人権は密接に関係していると思うが、身近なところで人権が蔑ろにされていると感じることはあるか、また、逆に人権が尊重されていて平和を感じるようなことがあればそれぞれ教えて欲しい。」

<sup>よだわかこ</sup>  
（依田和歌子町田市ユース）

「人権を侵害されていると感じるのは、自分の進路や生き方について1つの価値観を強く押し付けられる時であり、逆に平和を感じる瞬間については、学校での勉強や、十分な食事に温かい布団といった何気ない日常の中でふと感じることが多々ある。」

<sup>いけざわたかし</sup>  
（池澤隆史西東京市長）

「今回の体験を通じて、小中学校等で経験してきた平和学習に、何か改善を考えられるか。」

<sup>さかがみゆづき</sup>  
（坂上優月西東京市ユース）

「大学では平和を学ぶ機会が高校までに比べて少な

いので、大学でももっと機会を増やしてほしいということ、小学校から高校までの平和学習においても、主体性をもって生徒が取り組む機会を作ってもらいたいと思う。」

まるやまてっぺい  
(丸山哲平国分寺市長)

「ロシア・ウクライナやイスラエルの問題などを、どう今の教育に繋げていくか、どのように伝えれば、よりリアリティを持ってもらえると思うか。」

こばやしあおい  
(小林葵福生市ユース)

「平和に関心がある人だけを集めるのではなく、何かのイベントの折にフリーペーパーの配布等を行って、たまたま手を伸ばしたところに平和に関することがあったというようにすれば、学びの最初のステップを踏める人が増えるのではないか。地域のお祭りやスポーツイベントなどと絡めて、自分たちがたまたま恵まれた環境に生まれたのだということ、少しでも知ってもらいたい。」

このように、平和ユースと市長が、台本の無い生の意見を交わすことで、登壇者だけでなく観客にも心地よい緊張感が生まれ、貴重な議論の場となりました。平和ユースの皆さんには、これからも多摩の各自治体の平和文化を支える存在であり続けてほしいと願っています。



トークセッション

(平和文化企画課)

## 国連本部に広がった、 こどもたちの“平和なまち”

平和首長会議は、2018年から加盟都市のこどもたちを対象に“平和なまち” 絵画コンテストを実施しています。平和教育のさらなる充実を目的として続けてきた取組の成果を広く発信するため、被爆80周年の取組の一環として、令和8年1月12日から2月20日まで、国連本部で絵画展を開催しました。会場には、これまでの入賞作品16点を作者のメッセージとともに展示しました。

展示作品には、夜空の街を背景にぬいぐるみを抱いて眠る少女の姿や、世界の人々が手を取り合う色彩豊かな



展示会場の様子

都市の情景、青い海と緑の島を見下ろす風景など、こどもたちが思い描く“平和なまち”が描かれています。それぞれの作品には、安心して暮らせる日常や、多様な人々が共に生きる社会への願いが込められています。

ある作品には、「戦争は無知から起こります。戦争を止める唯一の方法は、発展し、知識を得て、戦争が人々に与える影響を理解し、より人道的で平和的な解決策を生み出すことです。」というメッセージが添えられていました。

展示を視察した中満 泉 国際連合事務次長（軍縮担当上級代表）と山崎和之特命全権大使・国際連合日本政府常駐代表は、「こどもたちが描いた絵を通じて届けられた平和のメッセージに深い感銘を受けました。」と述べました。



視察の様子

会期中、来場者は一枚一枚の作品の前で足を止め、見入っていました。

「どの作品もカラフルで前向きだ。」「自分のこどもにも見せたい。」

こどもたちの率直な願いは、国連という世界の舞台から、多くの人々の心へと届けられました。

なお、本年度の絵画コンテストでは、平和首長会議の加盟都市である世界19か国153都市のこどもたちから8,079作品の応募があり、そのうち52作品を入賞作品として決定しました。(表紙に優秀作品を掲載)



(入選した 52 作品)

(平和首長会議・国際政策課)

## 被爆者の皆様との対話

## 被爆体験証言者感謝状贈呈式を開催

広島平和文化センターでは、被爆80周年を機に、全国の自治体と連帯した若い世代への平和学習を開始し、被爆体験証言者の皆様から多大なる御協力をいただきました。

こうしたこれまでの御功績に感謝の意を表するとともに、これからのセンターの取組について語り合う場として、松井一實<sup>まついかずみ</sup>広島市長をはじめ関係者が出席し、令和7年12月15日（月）、広島国際会議場コスモスにおいて「被爆者の皆様との対話」（被爆体験証言者感謝状贈呈式）を開催しました。

冒頭、松井市長（広島平和文化センター会長）から、全国のこどもたちへの平和学習を大きく前進させることができたことへの謝意が述べられました。続いて、感謝状と記念品（被爆樹木を使用した置き時計「ピース・ティッキング・クロック」）が、被爆体験証言者を代表して梶本淑子<sup>かじもとよしこ</sup>さんに贈呈されました。

また、被爆80周年の年に取り組んだ様々な事業のうち、「ヒロシマ平和学習受入プログラム」の様子をまとめた動画を上映し、被爆体験証言者の皆様の御活躍を改めて振り返りました。

続いて、広島市、広島平和文化センターや若い世代の人々が「被爆の実相を伝え、平和を願う活動を継続する際に、次の世代にいかにもバトンを渡していくか」について、八幡照子<sup>や はたてる こ</sup>さん、梶矢文昭<sup>かじ や ふみあき</sup>さん、河野キヨ美<sup>こうの み</sup>さん、新井俊一郎<sup>あらい しゅんいちろう</sup>さんからそれぞれの思いを聞かせていただきました。

会の終盤には、各方面から寄せられた被爆体験証言者への言葉が披露され、被爆者の証言がこどもたちの心に深く届いていることを実感させる場面となりました。

- ・「知らなかった事実なども簡単に分かりやすく説明してくれたので、そのときの様子などがよく伝わり、この先どのような行動をしていけばよいのかを考えることができ、一番心に残りました。」

（第1回全国平和学習の集い参加生徒）

- ・「近年はデジタル化が発展し、自分が見たいコンテンツだけを選び、必要がない箇所は見ずに簡単に飛ばすことができます。そんな中、参加した子どもたちが日頃聞いたことがない『死や骨、皮膚のただれ、やけど、悲鳴、死体の上を歩く』などの生々しい話を聞いたことは、インパクトがあったと思います。これらの内容をそれぞれが自分の身近な人々に伝えていくきっかけになったのではないかと思います。」

（第1回全国平和学習の集い引率者）

- ・「被爆者はつらい記憶を私たちに託してくれているんだと感じ、私たち若い世代が次世代につなげる番

だと思った時間だった。」「これからは、命を大切に、どんな人にも尊敬の念と思いやりをもって生きたい。」

（ユース・ピース・ボランティア（英語ガイド））

- ・「核やせんそうが数えきれないほどのいのちと幸せをうばっていくのがよく分かりました。今後、同じまちがいをおかさないように考えるのが大切だと思いました。」（被爆体験講話に参加した児童）
- ・「自分は高校三年生で来年は県外に出る予定なので、大学で広島にいた人間として原爆の話をできるようになるべきだと感じて来ました。これからも元気に活動されることを願っています。」

（被爆体験講話に参加した生徒）

最後に、松井市長が各テーブルを回り、香川剛廣<sup>かがわたけひろ</sup>理事長らとともに、被爆体験証言者の皆様に改めて感謝の意を伝え、和やかに歓談しました。

会場内には、被爆体験証言者の皆様から寄せていただいた平和のメッセージも展示されました。

「戦争のない日々、なんと幸せなことでしょう。この平和な日本を皆さんの手に委ねます。」

「平和とは愛の心だと私は思います。相手を知り、相手を思いやり、相手の気持ちになれば、自然に笑顔がうまれます。核兵器がどれほど悲惨で恐ろしいかを知って欲しい、理解してほしい。知らない人に伝えてください。世界中から核兵器がなくなり、皆が安心して幸せに暮らせることを願っています。」

「人類の生存と絶滅。想像力をはたらかせて考えてみよう。」

「若い方の発想で地球から核兵器廃絶をめざしましょう。音楽、絵画、スポーツ等、何でもよいです。私達被爆者の声を伝えてください。」

広島平和文化センターとしても、被爆者はもとより、関係する皆様と手を携えて、このようなメッセージを広く伝えていく努力を続けたいと考えています。



松井市長・平和文化センター幹部職員との懇談

【参考】TSS市長インタビュー

被爆80年「このような思いを他の誰にもさせはならない」  
被爆者の想い 若い世代への継承を誓う 広島市



（平和文化企画課）

**国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 令和8年企画展**  
**受け継ぎ、語り継ぐ**  
**—原爆と第一県女—**

期間 令和8年3月1日(日)～令和9年2月28日(日)  
 場所 祈念館地下1階 企画展示室及び体験記閲覧室

広島県立広島第一高等女学校、通称「第一県女」(現：広島県立広島皆実高等学校)は、原爆により生徒・教職員合わせて301名が犠牲となりました。爆心地から800メートルの土橋付近で建物疎開作業を行っていた1年生223名は、その全員が亡くなりました。被爆した第一県女の生徒、そしてその最期を看取った家族の声を、体験記や映像、資料を交えて紹介します。



(追悼平和祈念館)

**平和の思いを発信する缶バッジ「We're Peace-Loving Citizens!」を販売**

令和7年度から、国内外の多くの市民とともに、平和に向けた大きなうねりを形作っていくことを目指し、「We're Peace-Loving Citizens!」と記した缶バッジを制作し、平和関連イベントの参加者等に配布するとともに、平和記念資料館のミュージアムショップで販売しています。

本年度の缶バッジは、平和記念公園内の原爆の子の像に捧げられた折り鶴を再生した紙を使用しており、折り鶴に託された願いを受け継ぐものです。このため、一つ一つ制作された缶バッジは、平和への決意を形にしているものと思います。



この缶バッジを着け、多くの市民が連帯の意を表し、原爆犠牲者の思いとともに、平和に向けた活動の輪がさらに広がっていくことを期待しています。

(平和学習課)

**広島平和記念資料館 令和7年度第2回企画展**  
**被爆した東南アジアの留学生**  
**—国を超えた友情—**

期間 令和8年3月27日～9月8日  
 会場 広島平和記念資料館 東館1階 企画展示室

広島平和記念資料館では、広島で被爆した外国人のうち、東南アジアからの「南方特別留学生」に焦点を当てた企画展を開催します。太平洋戦争中、日本の政策により来日していた彼らは、1945年8月6日、広島で原爆に遭いました。異国の地で被爆するという状況の中で、彼らは周囲の人々と励まし合い、助け合いながら日々を過ごしました。本展では、100点以上の資料や関係者の証言を通して、南方特別留学生の原爆被害の実態と、市民との交流について紹介します。



原爆で亡くなった  
 サイド・オマール氏  
 くりはらめいこ  
 (栗原明子氏寄贈)



企画展

(平和記念資料館 学芸展示課)

**広島市姉妹・友好都市との交流の推進役**  
**令和8年ヒロシマ・メッセンジャー**  
**が決定しました!**

広島市は、海外の6つの姉妹・友好都市を市民により身近に感じてもらい、友好関係と市民交流を促進するため、それぞれ「姉妹・友好都市の日」を定め、都市ごとに市民2人を「ヒロシマ・メッセンジャー」として委嘱しています。

このたび、令和8年のヒロシマ・メッセンジャーが決定しました。任期は1月1日から12月31日までの1年間です。

メッセンジャーは、「広島市姉妹・友好都市の日」記念イベントの企画・運営をはじめ、市内の学校や公民館などでの広報活動、国際交流・協力に関する行事などに携わります。

この1年間のヒロシマ・メッセンジャーの活動に、ぜひご期待ください。



松井市長とヒロシマ・メッセンジャーの皆さん



ヒロシマ・メッセンジャー紹介

(国際市民交流課)